

『住民主体のまちづくり』講演記録

主催：兵庫県、都市再生機構、兵庫県住宅供給公社、神戸まちづくり研究所、明舞まちづくりサポーター会議

日時・会場：2004年10月9日(土) 10:01～11:52 明舞まちづくり広場
参加者：18名(スタッフ8名含む)

1. 開会あいさつ(依藤氏：神戸県民局)

皆さん、おはようございます。台風が近づいている中、ご参加いただきありがとうございます。今日は、今までの3回のまち歩きを踏まえて「住民主体のまちづくり」のお話をさせていただきます。講師の小林郁雄先生は、元々はコー・プランというまちづくり会社をやっておられて、いろいろな地区のまちづくりに指導的な役割を果たされてきています。特に震災以降は、兵庫県や神戸市等々のいろいろな復興事業の計画策定や検証にも参画されています。現在は神戸山手大学環境文化学科教授や人と防災未来センターの上級研究員などをされておられます。では、よろしくお願いいたします。

2. 『住民主体のまちづくり講演』(小林氏：神戸山手大学教授)

皆さん、おはようございます。今ご紹介いただきましたが、本職は神戸山手大学の教授です。今回の3回のまち歩きで、それぞれの地区の良いところや問題点、提案が、現場の中からかなり判明してきたのではないかと思います。それらを踏まえて、これから一体どう考えて、どう進めていくべきかについて、その前提となるような「住民主体のまちづくり」をテーマに、お話をさせていただきます。

「まちづくり」と「都市計画」

「住民主体のまちづくり」という言葉は、20年ほど前に流行りましたが、今は「参画と協働」「協働のまちづくり」を使う方が多くなってきました。住民が中心になってやるということは当たり前になってきたので、「住民主体」という言葉は使わなくなってきたと思った方がいいかもしれません。

私たちは、何げなくひらがなの「まちづくり」という言葉を使っていますが、これは何かということを確認しておく必要があります。「まちづくり」という言葉は本当にいろいろな形で使われます。まちづくり公開講座もそうですし、福祉や緑のまちづくりだとかもそうです。行政側も、まちづくり局やまちづくり支援課とか様々な使い方をして

います。私は、「地域における、市民による、自律的継続的な、環境改善運動」という定義をしています。大事なのは、「地域における」と「市民による」という二つです。「都市計画」は都市計画法という法律に基づいて進められます。国全体で、行政府によって統一的に連続的に環境をつくっていくための制度だと言えます。それに対して「まちづくり」は、地域、それももっと狭い範囲の地区と言ってもいいかもしれませんが、そこに関係する住民を中心とした市民(住民だけではなく、当然商業主や学生、旅行者などの、地域に関係している方々全体を市民と呼んでいます。)がやる、自分たちの手で(自律的な)やり続ける(継続的な)環境を改善する運動です。簡単に言いますと、「都市計画」は制度で、「まちづくり」は運動であると考えています。ですから「まちづくり」は継続的な運動で終わりが無く、今やっているプロセスそのものが「まちづくり」です。まち歩きでいろいろな問題点を確認されたと思いますが、それらが無くなれば明舞団地のまちづくりは終わりかと言うと、そういうものではありません。

まちづくり/都市計画とは？

・まちづくり

地域における、市民による、自律的継続的な、環境改善運動

・都市計画

国家における、政府による、統一的連続的な、環境形成制度

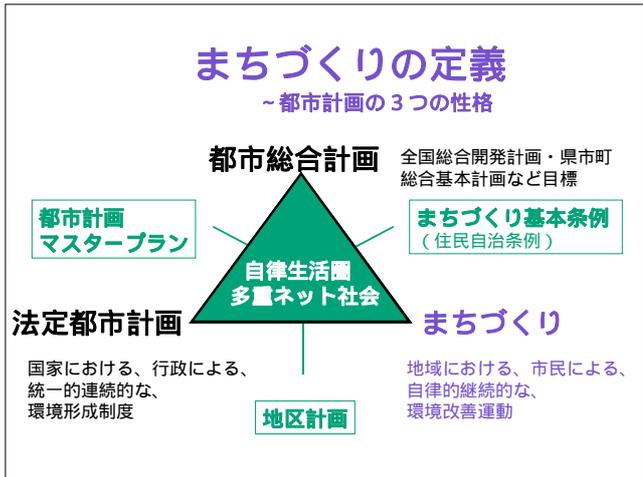
ん。一つの問題を解決しても次にまた違う問題が現れますし、あるいは違うタイプの、たとえば防犯の問題や環境の問題、景観の問題、福祉の問題だとかが起きてきます。人々の生活とまちが続く限り、延々と続いていきます。環境改善と言っても、道路や公園、住宅とかの問題だけではなく、自然環境の水や緑の問題や生活環境の防犯やゴミの問題、あるいは就業環境や地球環境など、いろいろな意味の環境全体の運動を指す場合もあります。ですから私は「まちづくり」を、福祉のまちづくりは福祉をテーマにした環境改善運動、緑のまちづくりは緑をテーマにした環境改善運動で、それも自分たちが自分たちの地域についてやると運動だと定義しています。

都市計画の3つの性格

どういうものが「都市計画」の範疇にあるのかを、もう少し広い意味の都市計画ということをお話します。先ほどの「都市計画」は、都市計画法という法律に基づいた「法定都市計画(左下)」です。そして、環境改善運動としての「まちづくり(右下)」があります。もう一つあるのが「都市総合計画(上)」で、これは10年ごとぐらいに閣議決定しながらやっていく全国総合開発計画、あるいは兵庫県、神戸市、明石市とかがそれぞれの総合計画をつくりまします。基本構想は議会の承認や議決が必要ですが、基本計画は行政が審議会を開いて、2~3年かけて10年計画や20年計画をつくりまします。これも「都市計画」と言われています。しかし、「都市総合計画」と「法定都市計画」はほとんど関係がなく、日常的な都市計画行政は「法定都市計画」で全てが進んでいきます。全体を見渡すために、「都市総合計画」を時々チェックする程度だろうと思いますが、最近ではこの両方をつないでいくための都市計画マスタープランがつくられています。「法定都市計画」は制度として執行する、「まちづくり」はそれとは別に自分たちの運動として行うという役割分担をしており、これらの3つともが必要だと思います。ただ、今まで「まちづくり」はほとんど位置づけされておらず、そういうことも全体の仕組みの中で必要ではないかと、震災5年ぐらい前から「まちづくり」という言葉が広がってきました。

ただ法定都市計画の中でも、地域の中で市民が決めていくような地区計画という制度を持っています。これは都市計画法の中ではイレギュラーなもので、国家的に決めるのではなくて地域で決めるという計画を別途定めています。ですから都市計画法に基づく「法定都市計画」と、市民の運動である「まちづくり」とをかりょうじて繋いでいるのが地区計画だと思っています。たとえば、市民が運動を続けていく時に、広く規制や制度化しなければいけない場面では、この地区計画の制度が一番役に立ちます。

では、その市民がやる環境改善運動が、それぞれバラバラにやっていていいのか。たとえば明舞で言えば、神戸側と明石側がそれぞれでやることになれば、一つのまちとしてそれでいいだろうかという話が当然あります。そこに「都市総合計画」と「まちづくり」とをつなぐ手立てが必要になってくるのです。そこで今、全国的に決められつつあるのが、まちづくり基本条例です。住民自治条例と言ってもいいかもしれません。兵庫県のまちづくり基本条例は少し違いますが、神戸市では協働と参画の条例が決められています。それぞれの地域がそれぞれの思いで続けている環境改善運動が集まった時に、まち全体としてどうするのか、あるいはそれぞれの運動がぶつかった時にはどうすればいいのか。それをどういう形で調整するのか、あるいはどういうやり方を皆の共通理念として持つかということ、まちづくり基本条例で決めるという意味だと思います。震災前まではほとんどやられていなかったのですが、特にこの5年間ぐらいの間に、すごい勢いで全国的につくられています。3年前で3百ぐらいの市町村が既に着手していたと言いますから、今は3千市町村の半分ぐらいでやっているのではないかと思います。



5年前に北海道のニセコ町で、2番目が宝塚市で、3番目が生野町でできました。5年前にはどこもやっていなかったことが、今全国の市町村でも着手されているというのは、多分こういうことが非常に必要になってきているということではないかと思えます。こうした3つのやり方のそれぞれに役割があるわけですから、お互いを補完しあいながらやっていくということを前提とした社会を、「自律生活圏多重ネット社会」と呼んでいます。

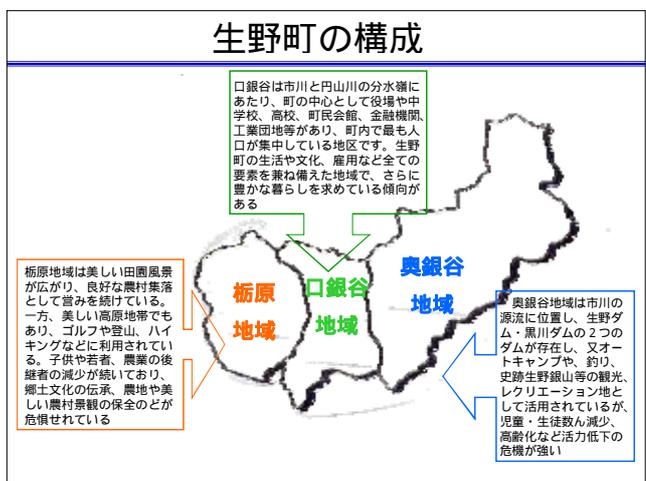
生野町の紹介

私が考える「まちづくり」を前提として、実際にやっている事例を紹介します。

一つ目は生野町の取り組みです。生野町は兵庫県の真ん中で、日本海へ流れる円山川と瀬戸内海へ流れる市川の分水嶺があり、日本海と太平洋の分かれ道の中心のところが生野町です。私は都市計画のコンサルタントをしていましたが、1995年の震災の日から震災復興の仕事だけしかせざるを得なくなり、ほとんど神戸から出たことはなかったのですが、96~97年に初めて被災地以外の仕事をしたのがこの生野町です。それ以来、ずっと生野町の「地域づくり生野塾」の設立から運営を手伝っています。

生野町そのものは、三つの地域に分かれていて、左が奥銀谷(おくがなや)で、真ん中が口銀谷(くちがなや)です。銀の谷と書いて「かなや」と読みます。生野銀山で有名なところですが、その銀が採れた谷ということです。口というのは、南北の道路が通っているところです。西側に、後から合併した栃原という地域があります。

白壁の鉱山住宅や江戸時代の井筒屋が残っています。右下の少し赤っぽい壁の家で、昨年改築が済んで非常にきれいなまちづくりのセンターになっています。最近ではここで会議をしていますし、昼間はいろいろな催しがあり、地域の人たちが順番に詰めて管理をされています。生野銀山は、江戸末期には銀をほとんど掘り尽くしてあまり採れなかったのですが、明治の開国直後にコアニーというフランスの鉱山技師が来て、西洋式の近代的な機械化された採掘技術を導入して再び大量の銀を産出しました。ですから鉱山は一つのまちをつくれますから、明治の初期一桁時代の様々な土木工事の遺跡とか、それに関連する住宅、お医者さん、芝居小屋などがありました。今はほとんど無くなってしまったのですが、ポツポツとこういうものが残っています。



生野町の総合計画

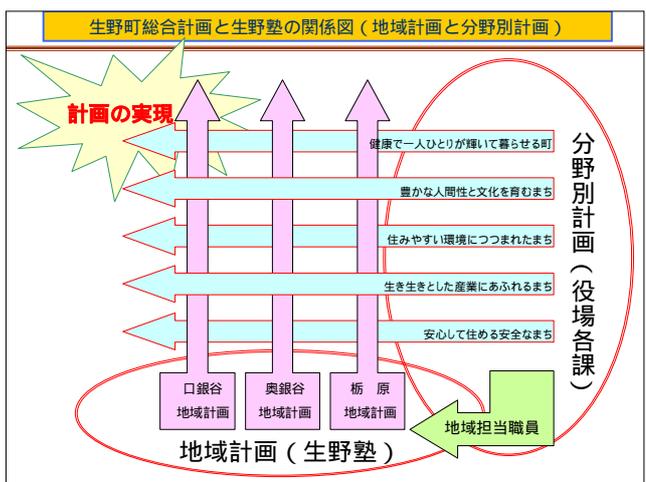
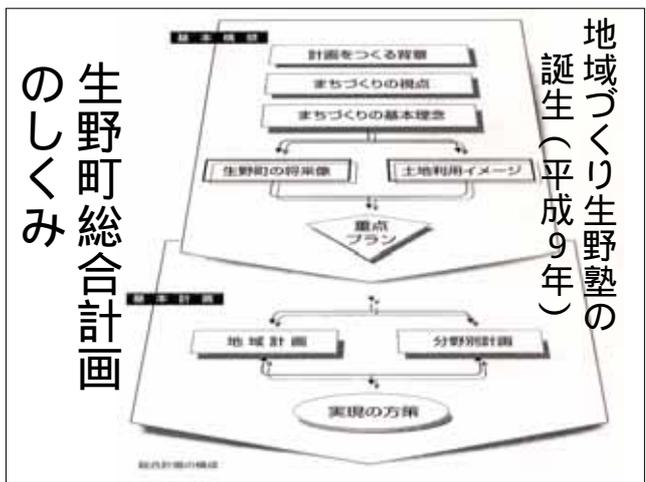
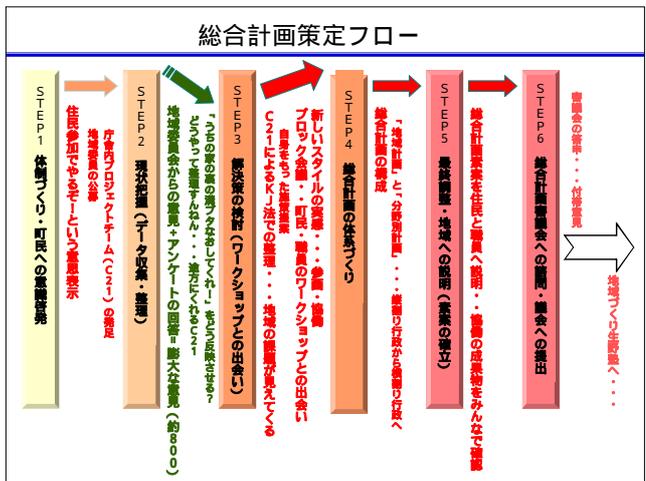
この生野町が総合計画をつくったのですが、当然のことながら住民参加型で、ステップ2では地域委員会からいろいろな意見を出したり、アンケートをしたりしました。それをどういうふうにするか悩んでいる時に、国土庁のアドバイザー派遣で私の友人の、今全国でワークショップの哲人と言われている東京の大久手計画工房の伊藤雅春さんが来られて、ワークショップでやればいいのかという話になりました。その時もう一人、高知の大谷さんというワークショップの達人がいて、二人が揃ってワークショップをやって整理していくということになりました。

全国的にはほとんどワークショップという言葉も無い1992～3年の頃で、アメリカで技術開発されたものを、留学していた人が日本に持ち帰ってきた頃です。ワークショップとの出会いと書いていますが、明舞でのまち歩きでも、川北二郎さんが発案したKJ法という方法を使って問題点を整理されたと思います。問題が複雑で、かつ広範囲であればあるほど、こういうやり方が有効だと思います。

そうしたことを、町民と職員とが一緒になって、ブロック会議をやり始めました。5千人の町ですから一挙に全員が参加するというような形で総合計画をつくりました。当然これは都市総合計画ですから、審議会で最終的にチェックをして計画案ができるわけです。多分今はどこでもそういう作り方でやっていると思いますが、この町の偉いところは、議会で総合計画が策定された時に付帯意見がつかしました。せっかく皆でワークショップやアンケート、地域委員会やブロック会議をしてつくってきたのだから、その総合計画を実施していくのに、単に役所の人たちが参考にするだけではなくて、自分たちで実施していくことを考えなさいという付帯意見がついたのです。これはなかなか見上げた見解で、今で言えば普通の話ですが、10年前としてはかなり先進的なことでした。それを現実的な事業にするためにはどうしたらいいかと役所が考えてつくったのが、「地域づくり生野塾」です。

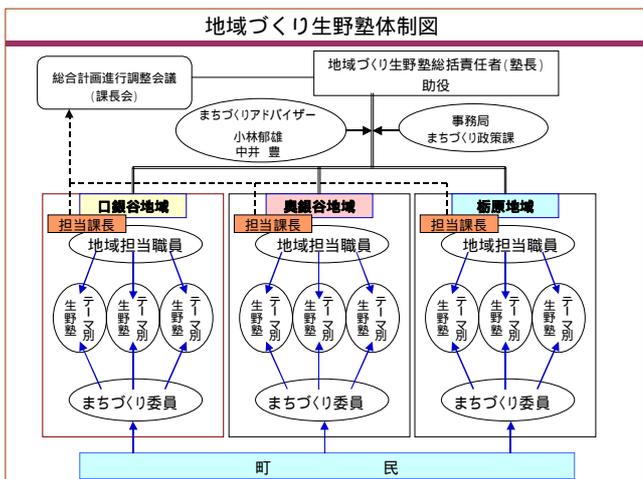
総合計画には、背景や視点、基本理念など、その町の将来像や土地利用のイメージ、この20年間に生野町としては何をしなければいけないかということが書いてあります。生野町には三つの地域がありますから、それぞれの地域ではこれをするという地域計画の部分と、福祉や土木、教育それぞれではこれをするという分野別計画の部分があり、それをあわせたものが総合計画です。ほとんどこの都市でも同じような格好をしています。基本構想と言われる上の部分は議会で議決されますし、基本計画の部分は審議会で決めて行政計画として決定されます。これをするために、「地域づくり生野塾」をつくったのが平成9年です。

分野別計画は、人間性と文化を育むとか、いろいろ書いてあります。これらは役所の保健部局や産業部局、都市計画部局などの各課が分野別に担当します。それに対して、三つの地域それぞれの課題については、生野塾でやっていこうということになったのです。この地域計画をする生野塾と、分野別計画をする町職員とが無関係ではいけないということで、地域担当職員が生野塾へ派遣されます。派遣と言ってもそう簡単にはいきません。町民の方は地域ごとに委員を公募して、9つのチームができました。それぞれ5人ぐらいずつの4～50人で、大体は総合計画をつくっていたような人たちが参加しています。問題は地域担当職員で、普通は税務課や土



木課とかにいますが、地域の人たちと一緒に会議をするのは夜になります。5時半までは税務課の職員が、6時か7時から口銀谷地域のテーマ別の塾の担当者になります。これは職務上の仕事ですので、当然残業手当がついてやっておられます。全体が5千人で職員百人の町ですから、保健士さんや幼稚園の先生もいます。町民側は4~50人いますから、町職員も4~50人います。ということは、町の職員の半分がここにいるわけです。合わせると大体百人で、5千人の中には当然子どももお年寄りもいますから、2~3千人しか実働部隊がないとすると、5%ぐらいの人が参加しているということになります。事務局はまちづくり政策課で、私と中井君がアドバイザーとして入り、全体は助役さんが塾長になっています。

担当課長は後からできました。5千人の町ですから町長・助役の下はすぐ課長で、課長が7~8人いて、後は係長・担当ということになります。この課長会が総合計画のテーマ別の進行状況をチェックするのですが、地域ごとでやることについては、生野塾の地域担当職員と住民とが一緒になって決めてまいります。逆に言うと、決めてもほとんど翌年の予算要求には影響しませんから、こんなことを言っても始まらないという意見が一杯出てきました。それで2期目から課長がそれぞれにつくということになり、生野塾で話し合ったものが課長会上がるというシステムができたわけです。



生野町 / 「いきいき」グループの活動

具体的に何をしたかを少しご紹介します。

テーマごとに9つのグループがありますが、その内の一つ「いきいきグループ」です。このグループは、総合計画の中で奥銀谷地域に属し、「住環境の再整備」というテーマを担当しています。このテーマで何をするかを、皆で何回か相談した結果、奥銀谷小学校と住宅の間に、荒れ果てて雑草が一杯生えた町所有の児童公園があまり使われていないので、これを何とかしようということになりました。それで早速、自分たちで整備に取り掛かりました。住民と町の職員の10人ぐらいのグル

生野塾個々の活動

いきいきグループの活動

施策名「住環境の再整備」

草が茂り荒れてしまった花壇でしたが・・・



地域住民とワークショップ等で計画し、実際の公園整備にとりかかりました。

生野塾個々の活動

総費用35万円！

手作りの公園完成



ープですから、町の人が業者から重機などを借りてきて自分たちで整地もします。コンクリートを打つ時の検査が終わりますとテストピースが山ほど余りますので貰ってきて、並べて花壇をつくりました。藤棚やベンチをつくるために間伐材も貰ってきて、自分たちでつくります。藤棚をつくれたり、ホームセンターでブロックを買ってきて敷いたりして、総額35万円でこの公園ができました。公園の向こうに写っているのが小学校です。「ひなた広場」という名前をつけました。この35万円は町の予算から出ています。

生野町 / 「さんない」グループの活動

「さんない」というグループのテーマは市川の清流の保全です。「さんない」というのは生野の方の方言で、蛍の幼虫が食べる貝のカワニナのことです。清流の保全と言ってもどうにもならないとか、清流になるとどうなるのかとかの話をするうちに、ここ数十年蛍を見ていない、清流になると蛍が飛んでもいいのではないかと、そろそろ蛍も飛ぶかもしれないという話になりました。生野町の市川源流は銀山採掘時の重金属排水で川が汚くなり、空気も悪くなったそうです。それで、蛍をもう一度生き返らせることが市川の清流の保全の指標になるのではないかと、とりあえず蛍を養殖して、ここを蛍の名所にしようと決めたのです。総合計画での目標は市川の清流の保全ですが、実際の事業は蛍の養殖と放流をしました。三段話としては飛びすぎる気もしますが、皆で決めてやるのであればそれもいいということでやり始めました。

蛍を放つというのは全国的にあちこちであり、それを商売にしている人もいて、蛍の幼虫養成キットを売ってくれます。月に1~2回ぐらい来て技術指導もしてくれます。最初の年は指導を受けて作りましたが、2年目からは自前の幼虫や卵で何万匹と育てました。千匹ほど放流して10匹ぐらい、翌年は場所を変えて放流して数10匹飛んだという話でした。自然状況の問題もありますし簡単には飛びません。ただ、市川の清流を保全するという目標を実現していくために蛍を飛ばそうと、この人たちが決めてやりました。

生野町 / 「活・楽・未」グループの活動

三つ目のグループ「活・楽・未」は「からみ」と読みます。口銀谷のグループで、播但線を高速電化する運動というテーマで活動しています。JR播但線が寺前駅まで複線電化されていて、そこから北は単線のジーゼルカーです。そこを高速電化しようという運動です。最初は、駅前と駅西側にビルを建てて橋をつなぐという駅前再開発の絵を一生懸命に描かれました。そもそも生野駅は無人駅で、日中だけシルバーセンターの人が切符を売っているという駅です。そんな駅にJRが投資するわけはありません。生野町は古い町で御三家というのがあり、三菱マテリアルは昔の三菱鉱山です。鉱山は財閥系の総本山で昔は力がありましたが、今はあまりありません。それから但陽信用金庫の本家がありますが、生野では商売にならないと昭和30~40年代に本社を加古川に移しています。三つ目が大きな建設会社でしたが、今は倒産してありません。駅前にその会社の用地があり、5~6年前に一緒にやろうと言ったのですが駄目でした。結局絵を描いて

生野塾個々の活動

さんないの活動

~ ホタルの養殖・放流 ~

施策名「市川の清流の保全」
卵から孵化させた幼虫



幼虫のエサとなる「さんない」(カワニナ)
生野でも少なくなりました・・・

生野塾個々の活動



確認された幼虫は
1000匹を超えました
数の確認も終わり
いよいよ放流です!

7月初旬に蛍が飛び交うことを期待しています・・・



現在は数匹確認されています。
まだ、少し早いようです。

生野塾個々の活動

活・楽・未の活動

施策名「播但線を高速電化する運動」



駅の待合室を利用した
クリスマスコンサート

も何ともなりません。3年目は再開発はやめて、とりあえず空いている駅舎で何かをしようということで、最初にやったのがクリスマスコンサートでした。駅前がみすぼらしいのでプランターを置いたり、コーラスグループや役場のギター同好会が夏の夕べのコンサートをしたりしています。それが乗客を増やすことになるかは大変疑問で、総合計画の意図とも変わりますが、少なくとも駅の周りが賑やかになってきたからいいのではないかとっています。

生野町 / 「ECO」グループの活動

このECO(エコ)のグループも市川の清流の保全というテーマです。先ほどの「さんない」は奥の方の市川で、こちらは口銀谷という出口の方での活動です。川の清掃や川でのイベント、ウォーキングマップづくりやエコマネーという分かりやすい活動で、環境省が表彰してくれました。グループの連絡先は、昼間は町役場のまちづくり政策課で、夜はこのエコグループの代表の方にと、二つ書いてあります。役場の人と地元の人という格好になっている象徴的なものです。

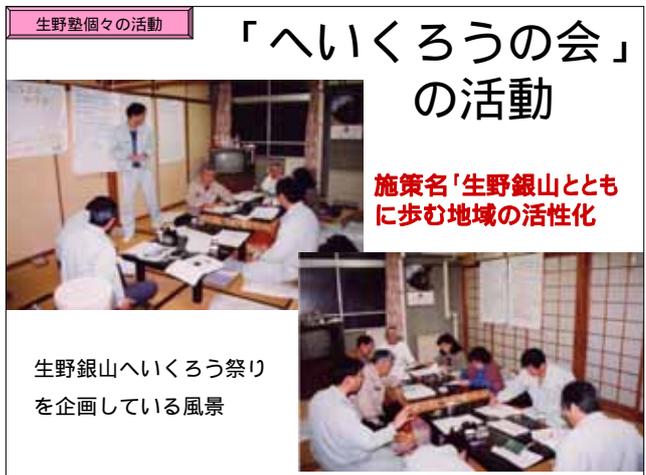
このグループの代表者は神戸で勤めていましたが、とうとう去年辞めて町会議員になりました。いろいろ話をしていると、議会で決めたらいいのではないかとということが一杯あるのです。それなら議員になるということで、今は生野塾でやっていた人たちの中の3人が議員になっています。



生野町 / 「へいくろうの会」グループの活動

「へいくろうの会」は、生野銀山と共に歩む地域の活性化がテーマです。生野銀山を運営しているのは三菱マテリアル(昔の三菱鉱山)で、生野銀山と佐渡金山の両方を管理しています。昭和40年代に閉山していますので、今は坑道の一部を観光用に整備してシルバー生野という観光施設になっています。できた時は珍しいので20~30万人の観光客が来ていましたが、今は4~5万人しか来ていないのではないかと思います。銀山で栄えた町ですから、シルバー生野などの観光施設も含めて、奥銀谷地域を活性化するというテーマです。

総合計画には、銀山の裏山を開発して住宅地整備をするとか書いてあるのですが、2~3回相談する中で、あの急斜面は無理だ、誰がするのだ、今でも住宅がたくさん空いているのに何故つくる必要があるのかという話になり、施策の中から勝手に止めてしまいました。それで相談して、「生野銀山へいくろう祭り」というお祭りをする事に決まり、今年が4回目で、シルバー生野の駐車場で全ての催しを自分たちでやっています。シルバー生野の所長が地元サイドに理解の深い方でかなり密接にやっています。姫路から観光バスが出るまでになりました。



生野町 / 「タカボシ」グループの活動

「タカボシ」は、スポーツ・レクリエーションゾーンの整備というテーマです。姫路が見える千メートルぐらいの「段ヶ峰」という山があります。登山ルートが良く分からないので、登る人のためにルート

整備と併せてマップを販売しようということで、自分たちでつくったのです。地図だけではなく、周りの植物や昆虫、野鳥などを載せなければいけないということで、それらを調べるので発行が1年遅れましたが、ルート沿いにある野草は何が生えていてどういうものかまで全部紹介されています。マップをつくるのがこのグループの仕事ではないかと相談して決めてつくったのです。去年はこのルート沿いにエコトイレを設置するところまでいっています。

次は河川公園の整備です。これは県土整備部が

生野塾個々の活動 **「タカボシ」の活動**
施策名「河川公園の整備」



河川公園の整備に
計画段階から参加し
皆の意見が反映された
河川公園になりました



この休憩所も
初めの計画にはなかったもの...

生野町 / 「ポンクロ」グループの活動

「ポンクロ」というグループのテーマは、貸農園の整備です。総合計画で休耕田を農園にしようということになり、町の産業課で予算化して貸農園をつくりました。何人かが借りて畑をやっているのですが、こういうところへ農園を借りに来る人はあまりなく、半分以上空いていました。もったいないということで、皆で蕎麦の花を植えました。貸農園の整備・運営を地元でやろうと言っていたのですが、結局何をしているかと言えば、自分たちで蕎麦を植えて蕎麦粉をつかって蕎麦打ちをして、蕎麦の事業をやっています。そういう格好で、最初の目的と違うことも一杯やっています。

生野塾の予算要望から事業実施までの流れ

それぞれ3つの地域のそれぞれの事業を、役場の職員と公募された委員たちが一緒に地域づくり生野塾で相談します。塾そのものは予算を持っていませんから、相談したものを課長会に提案をし、そこが予算化して議会に提案するという格好になります。

もう少し具体的に説明しますと、まずは来年の予算要望を事務局にします。事務局は総合計画の管理課長会に概要を説明して、生野塾としてこれだけ予算が必要だと出します。せいぜい総額4~5百万しかありませんが、担当課がそれぞれ予算案をつかって議会に出します。それで議会でOKが出ますと、

生野塾個々の活動 **「タカボシ」の活動**
施策名「スポーツ・レクリエーションゾーンの整備」

段ヶ峰登山マップの作成
登山ワークショップ等で情報収集、住民の手で登山マップを完成させました。



登山マップは200円で販売しており
登山道の整備に役立てています。



やっているコミュニケーション型整備事業というもので、地域の方の声を聞きながら整備するというなかなか進んだ制度です。県が河川公園をつくってくれるのであればと、計画段階から塾のメンバーが参加して、ワークショップを何回かやって河川公園ができました。これは意見だけ言えば県がつくってくれますから、こんな楽なことは無いと言っています。県の河川の整備部局も、地元がリーダーシップをとっているいろいろな言ってくれるので随分楽なのです。これに味をしめて、東の市川にも公園をと始めたものも去年完成しました。

生野塾個々の活動 **「ポンクロ」の活動**
施策名「貸し農園の整備」

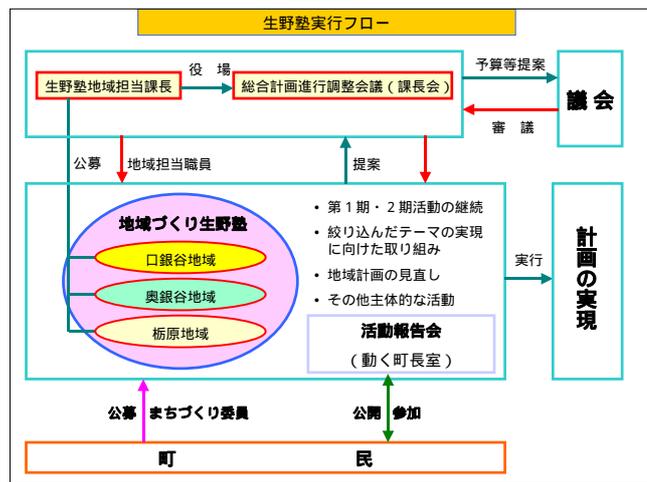
貸農園の整備・運営
休耕田を整備した
貸し農園



借りられた方の畑では
たくさんの農作物が実っています。



事業実施時に生野塾のメンバーが参画するという仕組みになっています。ですから、議会から文句が出るわけではないと誰も思うわけですが、実は生野塾の地元の委員の半数以上は地域の代表のような方ですから、そういう方々とその地域に長年住んでいる担当職員とが一緒になってつくった案を議員は断れません。議会が地元で練られた案を蹴ったら大変なことになると、事務局に文句を言っています。文句を言われても、生野塾へ言ってくださいということ、結局議員は、半年に1回ぐらいの生野塾の説明会に来るようになりました。



しかし、生野塾のメンバーもまどろっこしいと、先ほど言いましたように3人が議会へ行っています。生野塾でゴチャゴチャ言っているよりは、議会へ行った方が早いというのは、議会が決めるのですからそれはそうなのです。5千人の町で、議会と行政部局と住民とがこういう関係になってくるといのは、なかなか良いシステムだと思っています。市町村合併の折にこんなことを言うと怒られそうですが、十万人や百万人のまちもこれぐらいの単位で分かれた方がいいのではないかと思います。こういう意思決定ができる単位をコンパクトタウンと呼んでいます、そういうことになってくるといいのではないかと思います。

住民側も、次の年にやることを決めて予算化しないとお金は無いということになっていまして、次の年に急にピラを刷りたいと言っても、そんなお金は無いと言われれば自分で刷らなければいけません。ということは、来年やりたいことは1年前には決めなければいけないということです。普通、行政の方がやっている、あるいは企業の方々が当然やっているようなことを、住民が考えるようになるという仕組みになっています。

生野町のまちづくり基本条例

地域づくり生野塾は、総合計画達成のための臨時の組織ですので、この仕組みを条例にしようと決めたのがまちづくり基本条例です。生野塾がどういう原理でやっているのか、話し合ったことを事業化するためには何がキーポイントであるかをワークショップでやりました。その頃に北海道のニセコ町がつくった基本条例の条文には、似たようなことを書いていましたので、早速ニセコ町へ行きました。まちづくり委員の半数の方が自費で、3人の町職員は北海道庁へ出張ということで行きました。そして一生懸命勉強してつくったのがこのまちづくり基本条例です。自律共助や情報共有、参画協働など、県や神戸市がここ2~3年言っているようなことを5年ほど前からやっています。



参画協働など、県や神戸市がここ2~3年言っているようなことを5年ほど前からやっています。

神戸市灘中央地区の紹介

次は、神戸市灘区の灘中央地区まちづくり協議会の事例です。阪急王子公園駅が西にあり、北の山手幹線と南の JR、西の青谷川と東の都賀川に囲まれた地域です。この地域には水道筋という 1 丁目から 6 丁目まである結構長い商店街があります。その北側は密集した住宅地、南側は区画整理された住宅地です。そういう地域でまちづくり協議会をつくってまちづくりをやっていきます。いわゆる神戸のインナーシティと言われる東の一番北のところで、36 ヘクタール 500 店舗があります。水道筋と言われますのは、昭和 10 年ごろに阪神水道の水道管を埋めたところが商店街になったからです。

復興まちづくり地区?灘区灘中央地区 / 白地区の復興まちづくり

- 神戸市東部の灘区に位置する面積36haの地区で、中央を東西に走る山手幹線を挟んで「水道筋」の商業地（全部で10組織、約500店舗）が、その南北両側に住宅地が広がっている。
- 「重点復興地域」には指定されなかったいわゆる白地区であり、地域の人々が主体となった復興まちづくりを進めていくことが求められ、1995年11月にまちづくり協議会が設立された。
- まちの点検隊、まちの採点隊、まちの素描隊、まちの整備隊など順次復興まちづくり活動に取り組んできた。その最初の成果がまちづくりスポット創生事業による「なかよしランド」（1998年9月オープン）である。
- 市街地に残された震災空地を、地域のまちづくり団体などが3年間の時限で借用し、自らの手で整備・管理する広場・遊び場として活用する事業である。

灘中央地区まちづくり協議会発足まで

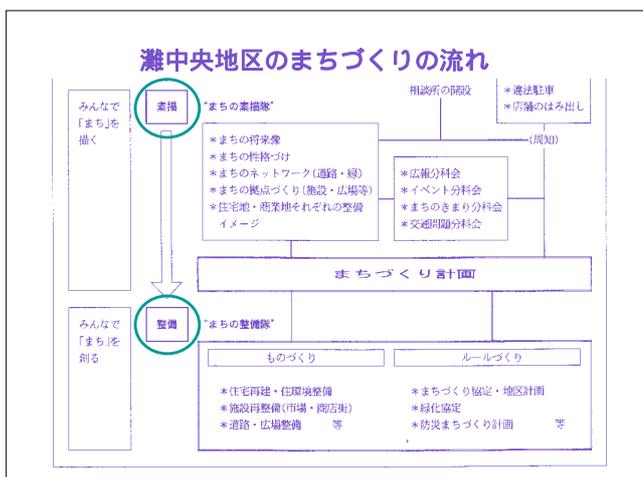
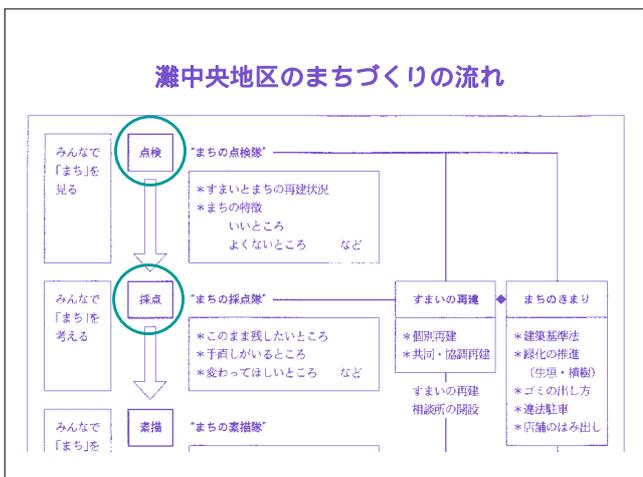
この地域は、震災前からいろいろな形でやっていました。水道筋商店街“メルヘン街道”といったような、震災前のいろいろな活動があり、震災後、商店街だけで話していても始まらないから、商店街と地域の人たちが一緒になってまちづくりをしようということで灘中央地区まちづくり協議会をつくりました。

灘中央地区のまちづくりの流れ

最初にしたことは、皆でまちを見る点検隊です。まちの点検隊は、住まいの再建状況、まちのいいところ、よくないところを調べます。次のステップは、皆でまちを考えるまちの採点隊です。このまま残したいところ、手直しがいるところ、変わってほしいところを皆で見ますが、まち歩きでここまで話をされたと思います。

これは震災直後の話ですので、住まいの再建、個別の再建や共同の再建とか、まちの決まりや建築基準法はどうなっているか、ゴミの出し方はどうなっているか、店舗のはみ出しはどうなっているかというようなことを採点しました。そうして点検したまちを図面にして、その中から、まちの資源、いいところや残しておかねばならないというようなものを整理しました。

次のステップがまちの素描隊です。まちの将来像や性格づけ、まちのネットワーク、道路や緑はどうなる、まちの拠点をどこへつくる、住宅地・商業地それぞれの整備イメージをどうするかを皆で描きます。そして、広報やイベントの分科会、まちの決まり分科会、交通問題分科会をつくってやっていきます。それらをまとめてまちづくり計画をつくります。



その次が皆でまちをつくるまちの整備隊です。水道筋は計画ができて、住宅再建・住環境整備、道路の再整備、まちづくり協定や地区計画、緑化協定をどうするなどの整備の取っ掛かりへ来ています。

灘中央地区 / まちづくり構想

住民や商店街の人たち、区役所の人も一緒になってまちづくり構想をつくりました。住宅と商業施設の将来方向をどうするのか。今後どういうことに取り組むのか。まちづくり協議会として、こうした全体計画の中の何をするのが大事なのか。住民組織としてできることはかなり限られてきます。先ほどの生野町と同じように、基盤整備に使うお金はあまりありません。そうなるとうちでも広報やイベントということになってきます。

取り組み内容：1

アーケード整備・カラー舗装

昭和30年代の水道筋商店街 灘センター商店街 灘中央筋商店街 水道筋1丁目商店街

取り組み内容：2

空店舗の活用・集客作戦

空店舗の活用

A: 水-ふれあいサロン・水6ふれあい広場
B: わらしべ塾 起業家育成セミナー
C: 新・まちづくりハウス

集客作戦

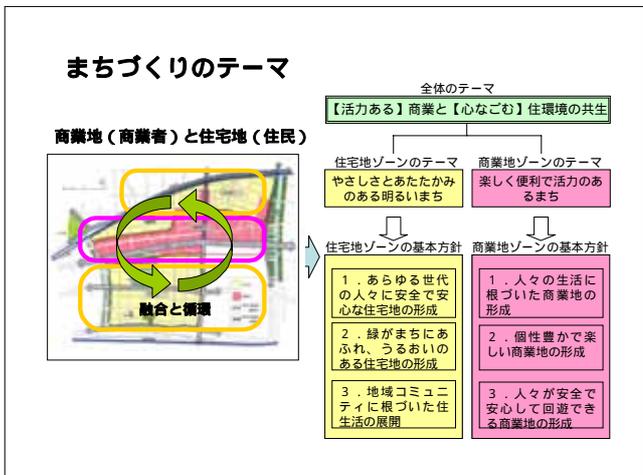
空き缶回収機

かわいいマップ すいすいカード マイバッグ運動 開放トイレ

灘中央地区 / なかよしランド

震災後、最初にできたのが「なかよしランド」です。まちづくりスポット創生事業という事業があり、震災でできた空地为神戸市が土地所有者から固定資産相当額で3年間だけ借りて、それをまちづくり協議会などに無償で貸すという制度です。無償どころか、整備費3百万円と管理費年間10万円を助成するという制度です。「なかよしランド」の整備として、灘中央地区では第1号としてこれをやりました。

空地为皆で探して、所有者に話をすると、10件の内9件まで断られたのですが、やっと一つだけお医者さんが貸してくれることになり、皆で公園をつくりました。空地为皆で遊べる広場にしようという



今、協議会としては、「なつかしき心のまちかど再発見」ひとづくりバンクの「タウンエンジェル」、「まちづくりマーケット」、「安全マップ」、「かわいマップ」それから「開放トイレ」、「地域通貨」、「まちづくり総合支援組織」に取り組んでいます。

総合計画には、商業地ゾーンは楽しくて便利で活力のあるまちをつくるために生活に根づいた商業地で個性豊かでとあります。北と南の住宅地は安全で安心とか、緑がまちにあふれるとか、コミュニティというようなことが書いてあります。

具体的にやっているのは、商店街はアーケードの整備やカラー舗装など、いろいろなことをやっています。まちづくり協議会でやること、商店街がやること、行政がやるものが少しずつ重なってくるのですが、空店舗の活用や集客作戦、かわいマップ、カード事業というのは商店街とまち協が一緒になってやっています。マイバッグ運動や開放トイレはまち協がやっています。起業家セミナーやまちづくりハウス、空店舗を利用したハウス、わらしべ塾は行政と商店街が一緒になってやっています。そういう形で今進んでいます。

心のまちかどマップ・写真展は、昔の写真を住民の人たちに公募して、まちづくりハウスに持ってきてもらいました。この地域は震災であまり火事になったり大きく倒壊したりしていませんので、古い写真が一杯出てきました。水道筋そのものが昭和 10 年から後のまちですが、結構いろいろなものがありました。今それを、CD に何百枚かを収納して、まちづくりハウスを手伝っていた作曲家志望だった神戸大学の大学院生が自分で作曲をした音楽を入れて CD を販売しています。水道筋へ行くことがあれば買ってあげてください。千円ぐらいで売っていると思います。

市民まちづくりと市民活動社会（まとめ）

今までお話したまちづくりが、どういう状況の中にあるかということをお話します。

住民というのは住んでいる人ですが、住んでいる人だけではいけないだろうと思います。住んでいる人は中心であります。商店街の人たちや法人の人たち、あるいは行政の人たち、そういう地域に関係するいろいろな人たち全部を巻き込んでやっていくという意味で「市民まちづくり」という言葉を使っています。これは、市民活動社会というものを念頭において話をしています。

20 世紀というのは、国際化された企業が中心の企業活動世界で、時代を代表する言葉は、「国際・企業」ではないかと思っています。18 世紀や 17 世紀は農業社会で、会社が世界を支配するということはありませんでした。会社の支配は 18 世紀から始まり 20 世紀に最大のピークがきて、21 世紀は没落していくだろうと思っています。そうだとすると、21 世紀は一体どういう人たちが社会を構成するか。これは民際、人と人とのつながりが中心の社会で、コスモポリタンと言った方がいいかもしれません。企業に属して働いているということが 20 世紀の大半の活動の中心でしたが、多分 21 世紀は、会社はあてにはなりません。大企業が全てを支配するような社会は終わるのではないかと思っています。その時に、市民自らの活動を前提とした社会ができていくというのが一つの前提です。ですからその「市民活動社会」というのが 21 世紀の社会像ではないかと思っています。その時の「地域における、市民による、自律的継続的な、環境改善運動」を「市民まちづくり」と呼んでいます。

市民まちづくり

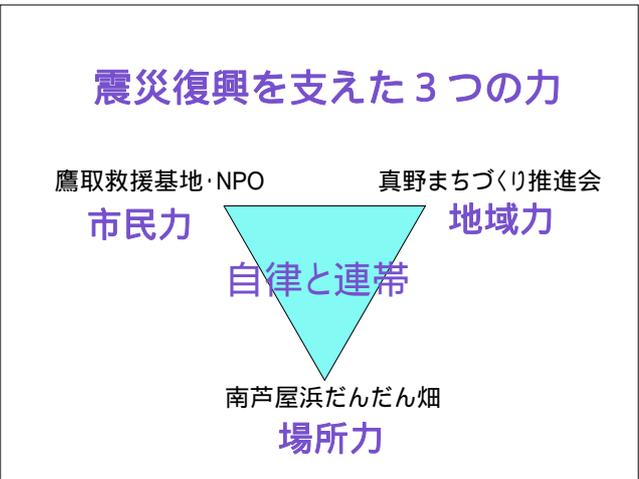
/ 市民活動社会における合意形成

- 「**自律と連帯**」を合言葉とする「市民活動社会」が21世紀の社会像である。
- そこで繰り広げられる活動の総体が「市民まちづくり」であり、「**地域における、市民による、自律的継続的な、環境改善運動**」と定義される。

震災復興を支えた3つの力

震災復興も、まずは地域の力（地域力）です。これは地域に根ざした自治会やまちづくり協議会がどれだけちゃんとしていたかということです。それに対して、ボランティアや NPO のようなテーマを持った人たちの力（市民力）があります。そういうものが、先ほどのプラットフォームのような場所に集うことができること（場所力）。この3つの力が相乗的に働いて市民社会が回転していくと思っています。鷹取の救援基地や真野地区などは、全国でも有数の地域の力を持ったゾーンです。

全体の鍵を握るのは、多分まちの地域力を代表するまちづくり協議会だろうと思っていますが、住民を中心とした自律的で連帯する市民組織であればそうでなくてもいいのです。そこに実際の形として集まりがあってもいいし、そういうチャンスだけあ





鷹取救援基地のボランティアとTCCに集まるNPO

真野四半世紀のまちづくり活動の成果

仮設居住からのコミュニティ・アート計画

鷹取教会ペーパードーム

真野・東尻池コート

南芦屋浜復興公営住宅

震災が生んだもの

まちづくり協議会・地域力
真野まちづくり推進会



プラットフォーム

ふれあいセンター・場所力
コレクティブハウジング
・芦屋だんだん畑



ネットワーク

ボランティア・NPO・市民力
鷹取救援基地

そこに集まることができる。市民やボランティア・NPOの方にとってはネットワークができることになるのです。そのために神戸市では参画と協働のプラットフォームというようなことを言っていますし、生野町では、まちづくり基本条例でそういうことを制度化しているのだと思います。

参画協働社会におけるまちづくり

復興市民まちづくりのようなことが、実際にすぐ震災直後から進められたのは、震災前からいろいろな環境改善のための運動をしていた地区で、ほとんど当日の午後からスタートしています。それは皆、復興という前の救出・救援活動を直ちに始めなければいけなかった。直ちにその日の晩御飯や水を確保するという活動をすぐ始められるのは、やはり常日頃身に付いた活動をしていた場所です。そういうことが非常に重要だと思えます。

では、これから日常的に何を中心にすればいいかということですが、とりあえず3つだろと思っています。まずは安全・安心の問題です。これは被災地の神戸や明石としては、地域の人たちが一番前提に考えるべきことだろと思っています。行政の方でも、防災福祉コミュニティとかの形で手だてを持

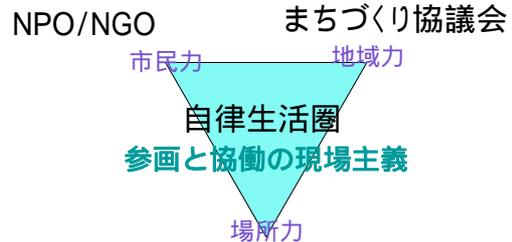
ってもいいし、場所だけあってもいいと思います。そうしたまちづくり協議会のようなものとボランティアセンターのようなものが同じ場所に集うために、コレクティブハウジングやだんだん畑といった場所が非常に重要な力を持ってきます。地域の人たちにとってはプラットフォームができ、皆が

市民まちづくり

／市民活動社会における合意形成

- ・「自律と連帯」を合言葉とする「市民活動社会」が21世紀の社会像である。
- ・そこで繰り広げられる活動の総体が「市民まちづくり」であり、「地域における、市民による、自律的継続的な、環境改善運動」と定義される。
- その活動の鍵を握るのが「まちづくり協議会」である。
- 市民活動社会の市民まちづくりにおける倫理的論理的な社会基盤は「合意形成」である。
- まちづくり協議会は、そうした合意形成のための、住民を主体とする集まり・機会・場（フラットなプラットフォーム）であり、**住民を中心とした自律的で連帯した市民組織**である。あるいは、あるべきである。

震災復興の教訓



プラットフォームとネットワーク

参画協働社会におけるまちづくり

／常日頃からのまちづくり

- ・震災以前からまちづくり活動のあった地区では、震災直後から秩序だった将来を見据えた**復興市民まちづくり活動**が直ちに始められている。
- ・突然の緊急時には、**常日頃の身に付いた活動**がまことに重要な役割を果たした。
- ・まちづくり協議会の現在の最重要な取り組みを3つ挙げると「**安全安心・福祉健康・景観魅力**」のまちづくり。
- ・それらに、**常日頃から、継続的に**取り組んでいくことが必要である。

っているわけですが、まずは地域の人たちが一緒になって何か考えてやっていこうという時に一番大事なのは、安全に安心してこの地域に活動できるという前提に近いような、教育の問題や治安の問題、バリアフリーの問題とかが関係してくると思います。2番目が福祉と健康の問題です。今は介護や高齢者の面倒をどう見るかということが最大のテーマですが、これから最も重要なのは児童福祉、子育ての問題だろうと思います。子どもがどんどん減っています。子どもが健康で児童福祉がちゃんとしていることが一番の元気の元です。そこを取り組むことができるまちが、元気になっていくと思います。3つ目が景観の問題です。罰則規定を持った景観の法律がつけられましたが、それでまちがきれいになるとはとても思えません。道路や川だけをきれいにしても、まち全体はきれいにはなりません。そこに住んでいる人や関係する人が、その地域を魅力ある自分の誇りが持てる地区だと思える人がきれいにするわけです。多分この3つが、市民まちづくりが今取り組むべき最も重要なことだと思います。それを常日頃からやり続けていくことを、念頭においてやっていただければいいのではないのでしょうか。

これで私の方の話は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

質疑応答

ボランティアについてですが、生野ではそもそもボランティアが存在しなかったのでしょうか。それと、明舞では40人ぐらいのまちづくりサポーターがおられますが、なかなか広がっていきません。サポーターまでいなくてもボランティアであればという方もおられると思うのですが、ボランティアが組織できるものかどうなのかということを含めてお聞きします。

生野町でもいろいろなタイプのボランティア活動はたくさんありますが、今言われているのは多分ボランティアという人だと思います。町外からそういう人が来るということはありません。そういう意味では、その地域と直接関係は無いけれども手伝いに来るといったタイプの人は生野塾にはいません。それは良くない部分もあるので、生野高校の町外から通ってくる生徒たちや、三菱マテリアルの研修で行き来している従業員をつかまえようと言っています。5千人のまちで人材が枯渇していますから、今言われたボランティアのような外部の血が要するという話は当然あります。水道筋も地域の近隣商店街ですから、一般的なボランティア活動の拠点にはなっていません。ただ神戸大学に近いので、イベントの時に、神戸大学の学生ボランティアを考えています。介護や児童福祉でのボランティア活動をしていて、その仲間が西宮や中央区から手伝いに来るといったタイプもあるかと思っています。そこに住んでいて、周りの人たちと何かをやっている人はたくさんいますが、自分たちのまちを自分たちでやるというのをボランティアと言うかどうかという問題です。多分、住んでいる人もボランティアだと思ってやっているのではないかと思いますが、そこを変えないといけないと思います。

私は明石の大久保から来ました。市民のまちづくり組織の立ち上げを、10人ほどで県の地域ビジョンのグループ活動として進めています。今日の話の安全安心と福祉健康、景観の3点の中で、私は景観の魅力というものをやっています。それで、各市町の行政がどうやっていたのかというやり方を調べて、それを踏まえて3市2町の東播磨の景観に関わっているグループの活動を、事例を入れながらいろいろやっています。そういうことに住民意識を上げていくにはどうすればいいのか、住民が一緒にやろうとするためには今度どういうふうになればいいのかを考えていますが、それはなかなか難しく、どういう方法でやればいいのかというアドバイスをいただければと思っています。11月20日に、3市2町のグループで景観をテーマにまちづくりフォーラムを開催します。たとえば花と緑のまちづくりをしているグループもあるでしょうし、空き缶やポイ捨てのことをしているグループもあると思いますので、そういう市民と一緒にやろうではないかと考えています。

おっしゃるとおりで、ぜひやっていただいたらいいのではないかと思います。そう簡単には広がらないかもしれませんが、自分でずっとやり続けるということなので、他の人まで一緒にやろうということには強制力を持ちませんから難しい問題です。でも、いろいろな人に来ていただくために呼び掛けながら、自分たちでずっとやっていればいつかは広がっていくということしかないと思います。3市2町というのは理解しにくいのですが、自分たちだけでやるのであれば他所のまちのことは知らないし、まずは自分のところをきれいにしないことには始まらないという気がします。しかし、掃除や花を植えるとなれば、

3市2町の全部をやるわけにはいかないの、その現場はどこかになるわけ。そこからやるということしかないのではないのでしょうか。

何かをやるとした時に、どこにどういうグループの方がおられて、そういう方を一緒に参加させるのは、ネットワークが大事だと思うのです。それも一つの課題だと思っています。

3市2町でとなりますと、まちづくりというような形ではなくて、緑や介護、子育てとかいうテーマを持って呼びかければ、花好きは多分3市2町にいますので、その人たちが集まれるということになれば、ネットワークはきっとできると思います。県に届けている団体やリストがあると思います。多分花好きの人は自分のまちだけなんてことは言いませんし、隣のまちや神戸、東京などの花好きと手紙を書いたりしてやっていると思いますから、そういうネットワークはすぐ見つかると思います。何かテーマを決めないと、広い時のネットワークは難しいと思います。地域の中では、花だけと言っても始まりません。花も好きな人もいれば、動物が好きな人もいるし、嫌いな人もいます。しかし、そのまちを皆できれいにしようという意識はあるでしょうから、そういうことで呼びかければいろいろな人が出てくると思います。その二つをどうやって組み合わせるかが大事です。

住民に地域を何とかしようという意識を持たせることはなかなか難しいのではないかと思います。どうすればいいのかということに一番関心があるのです。

生野町でも5千人の人口で百人ぐらい、半分は役所の人ですから50人ぐらいです。5千人の1%ですが、赤ちゃんから高齢者までいますので、実働部隊で言えば4~5%だと思います。1期が50人で半分は入れ替わり、今は3期か4期になっていますから、総勢でも百人ぐらいです。それで終わり、後は出てきません。ということは、稼働人口2千人として1割が2百人だから5%です。残りの95%は無関心かと言えばそうでもないのです。文句を言う人は当然います。議会がやっていることも無視して勝手にやっているとか、好き勝手なことをやるのに役人を手伝わせて公園を整備しているとか一杯あります。自治会活動を昔からやっている人にとっては腹立たしいということもあります。そういう文句を言っている人が5%ぐらいはいます。残り90%で知っている人が半分ぐらいですから、残り半分は全く無関心です。5千人の町でもそういうものです。百万人であれば、5%の5万人がやるかと言えば絶対やりませんよね。十万人のまちでも2~3百人だと思います。ですから、あまり広げるということよりも、自分たちが楽しくやった方がいいのではないのでしょうか。多分それを見て、一緒にやろうという人は必ず出てくると思いますが、それが全部に広がるというようなことはあまり無いという気がします。多分そちらはそちらで、まちづくりとは違う集まりをされていると思います。反原発運動かもしれませんし、あるいは少年野球チームかもしれません。それぞれの人生があるわけですから、それはそれで仕方がないのではないかと思います。ただ、まちづくりという方が一般的でもありますし、いろいろな人に呼びかけて広がる可能性は高いので、呼び掛けは怠らずにやろうということはいつも言っているのですが、なかなかそううまくはいきません。

3. 閉会あいさつ(依藤氏:神戸県民局)

それでは今日の前期公開講座の締めのお話を終わりたいと思います。改めまして、今日お話をいただきました小林さんに拍手でもってお礼とさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

従来からお知らせしていますように、今度の17日の日曜日、1時半から松が丘ビルで40周年シンポジウムを開催いたします。既に申し込みをいただいている方もおられますが、ぜひともシンポジウムにもご参加をよろしくお願ひしたいと思います。それから続いて恐縮なのですが、11月5日の金曜日からは、後期公開講座セミナー編を開催します。これはこの場所で、金曜日の夜7時から4回にわたって行いますが、今日のお話にも少し出てきましたコレクティブハウスとか、高齢者支援のお話とかを4回にわたってやりますので、よろしくお願ひをしたいと思います。

それでは今日はどうもありがとうございました。